

萩の馬場跡遺跡発掘調査報告書

一分譲地造成工事に伴う発掘調査

令和6年3月

株式会社シリウス

一関市教育委員会

序

一関市萩荘地区は、自然豊かな丘陵部が大半を占め、北部に磐井川が東流しています。この地区では、縄文時代から人々の生活が確認でき、弥生時代の標準遺跡の一つである谷起島遺跡があります。このほか、多数の埋蔵文化財包蔵地が所在していますが、その一つに萩の馬場跡遺跡があります。磐井川の支流久保川の南に位置し、古代の宿駅跡と考えられている場所です。

令和3年度に、萩の馬場跡遺跡に近接する萩荘字境ノ神地内において分譲宅地造成工事を計画し、一関市教育委員会による工事立会を実施したところ、柱穴や土坑を確認しました。これを受けて緊急発掘調査を実施し、このたびその成果を本報告書にまとめたところです。本報告書により、この調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々にご協力いただきました。衷心より感謝を申し上げます。

令和6年3月

株式会社シリウス

代表取締役 佐藤 幸夫

一関市教育委員会

教育長 時枝 直樹

例 言

1. 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和3年度に実施した萩の馬場跡遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査は、一関市萩荘字境ノ神地内の分譲宅地造成工事に係る試掘調査において遺構を確認した範囲及びその周辺の掘削を受ける範囲の記録保存を目的とした緊急発掘調査である。
3. 調査対象地は、萩の馬場跡遺跡（一関市萩荘字境ノ神355-1、355-8）である。
4. 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴（令和3年度）であり、現地調査は文化財課が担当した。

5. 調査体制（令和3年度）は以下のとおり。

一関市教育委員会	文化財課	課長	千葉 浩
		文化財係長	金野 修
		主任学芸員	菅原 孝明
		文化財調査研究員	光井 文行
			阿部 充
		会計年度任用職員	小岩 誠也

6. 本書の作成は令和5年度の文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。

一関市教育委員会	文化財課	課長	氏家 克典
		課長補佐兼文化財係長	金野 修
		学芸主査	菅原 孝明
		文化財調査研究員	光井 文行
			阿部 充
		会計年度任用職員	小岩 誠也

7. 本書図3に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。
（許可番号 令和6年3月14日 政第12004号）

8. 土層断面図の土色表示は、新版標準土色帖2002年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。

9. 調査協力者・機関（敬称略・50音順）

株式会社シリウス、株式会社甲南

岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

目 次

序	1
例言	3
目次	4
I 萩の馬場跡遺跡	
1 遺跡の位置と地理・歴史的環境	5
2 調査に至る経緯	11
3 調査結果	13
4 まとめ	15
遺構調査図	17
写真図版	25

I 萩の馬場跡遺跡

1 遺跡の位置と地理・歴史的環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年9月20日に一関市、花泉町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに平成23年9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

萩の馬場跡遺跡のある一関市萩荘は一関地域に属している。一関地域は岩手県南西部に位置して北は西磐井郡平泉町、東は一関市川崎町（川崎地域）、西は秋田県雄勝郡東成瀬村、南は宮城県栗原市と接している。

（一部 一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査』「1.位置と環境」より）

（1）地理的環境

本遺跡のある一関市萩荘は奥羽山脈の東部にあたる。奥羽山脈の東麓から北上山地西縁にわたって、東西に分布しているのが磐井丘陵である。一関市（一関地域）の全域と平泉町、一関市花泉町の範囲である。磐井丘陵は西縁部が標高500～400mから次第に低下し、東縁の真滝・弥栄地区で標高100m前後となる西高東低の分布になっている。

一関市内の西部は磐井川流域であり、市街地東部の真滝、弥栄、舞川地区も滝沢川などの北上川支流流域になっている。市内西部を流れる小河川沿いにも、小規模な平野が断続的に発達し、場所によっては丘陵内の小盆地の盆地底になっている。これらの大部分は沖積平野でなく、段丘の段丘面となっているものである。比較的広がりのある磐井川下流の赤荻や萩荘の平野などは更新世後期の河床面が段丘化したもので、磐井川を望む急な河崖が段丘崖である。

赤荻盆地の河岸段丘は、開析されて段丘の原形をとどめていない段丘頂面を除けば、上位から泥田段丘・鶴巻段丘・古内段丘の3段丘に区分することができる。泥田段丘が約45～25m、鶴巻段丘が約10m、古内段丘が約5mである。鶴巻段丘は更新世後期のウルム氷期という時代の産物で、約2万～3万5千年前ということがわかっている。

赤荻盆地の鶴巻段丘面は蘭梅山と釣山を結ぶ線を越えて東方に広がり、三関付近で丘陵に達している。すなわち一関市の中心市街地の大部分は、鶴巻段丘の一部である。北上川と磐井川の合流点を含めて、北上川の沿岸に広がる河岸平野は、磐井川沿いにあるのは、磐井橋の下流側付近で分布が流路沿いに挟まれて上流に及んでいる。一関の中心市街地付近における鶴巻段丘と河岸平野との境界は、高低差がわずかであまり目立たないが、ほぼ桜木町と桜町を結ぶ線である。黒沢橋のやや上流側左岸から銅谷町にかけて、鶴巻段丘を下刻して北東方向に流れた磐井川本流または分流の旧河道がある。旧河道をのぞむ段丘崖には、段丘構成礫層が露出している。本遺跡は磐井川右岸の鶴巻段丘に立地している。

(2) 歴史的環境 (図2、表1)

一関市西部で確認されている遺跡は、磐井川などの河川に沿った平野部、段丘面、丘陵上に分布している。本遺跡の周辺にも、縄文、弥生、古代、中世、近世の遺跡が分布している。縄文時代の遺跡は、縄文早期で下モ下釜遺跡(31)、前期で鈴ヶ沢遺跡(38)、中期で西光寺裏遺跡(34)、鈴ヶ沢遺跡、後期で下袋遺跡(24)、下川台遺跡(40)、羽根橋Ⅰ遺跡(42)、羽根橋Ⅱ遺跡(43)、藤走遺跡(44)、晩期で十二神遺跡(5)、上野Ⅰ遺跡(22)、上野Ⅱ遺跡(21・23)、下袋遺跡、谷起島遺跡(30)、下モ下釜遺跡等がある。縄文時代後期、晩期の遺跡は久保川、磐井川周辺の沖積地に分布している。

弥生時代の遺跡としては、下袋遺跡、口袋遺跡(26)、谷起島遺跡、鈴ヶ沢遺跡、野中遺跡(52)等がある。主に久保川、磐井川周辺の沖積地に分布している。

古代の遺跡としては、奈良時代の遺跡がなく、平安時代では竪穴住居跡が検出されている泥田廃寺跡A・B遺跡(6・7)、下モ下釜遺跡、中島遺跡(27)、西沢遺跡(49)、平安時代の寺跡が検出されている泥田廃寺跡遺跡(6・7)、平安時代の柵の擬定地として、小松柵擬定地遺跡(29)、石坂柵遺跡(16)、遺物だけが出土している月町遺跡(9)、松ノ木遺跡(25)、工業高校隣接遺跡(33)、そして、宿駅跡である萩の馬場跡遺跡(1)、磐井駅擬定地(13)などがある。泥田廃寺跡A・B遺跡からは礎石建物跡(2棟)が検出されている。

中世の遺跡では、中世の城館跡として、若宮館遺跡(8)、赤萩館遺跡(12)、上黒沢城遺跡(39)、鈴ヶ沢遺跡、中世末以降の城館跡として中里城遺跡(2)、臥牛館遺跡(3)、若宮館遺跡、宮田館遺跡(11)、田高館遺跡(15)、杭丁館遺跡(17)、下黒沢館遺跡(36)、市野館遺跡(37)、小姓館遺跡(41)、的馬館遺跡(50)、城館跡擬定地として小石名沢古館遺跡(4)がある。

近世の遺跡としては、墓壇が検出されている下モ下釜遺跡、鈴ヶ沢遺跡、陶器の生産遺跡である赤萩焼遺跡(10)、墓関係の遺構がある弥悦塔遺跡(14)、掘立柱建物跡が検出されている遺跡は、鈴ヶ沢遺跡(6棟)、下モ下釜遺跡(2棟)、一里塚が残っている苺又一里塚遺跡(47)などがある。

古代史上の事跡は断片的であり多く伝えられておらず、8世紀末～9世紀の東北平定の頃からである。宗教による蝦夷の同化政策によって、寺社の建立が行われ、配志和神社と舞草神社の延喜式内社が置かれた。発掘調査により泥田廃寺跡が発掘されたことで、10世紀代の寺院の存在が確認されている。10世紀後半より遺跡が増加し、人々が移動してきたことがわかる。11世紀代では、『陸奥話記』『吾妻鏡』などの歴史的記述に関係する遺跡である萩の馬場跡遺跡、小松柵擬定地、磐井駅擬定地があり、本遺跡の周辺には前九年合戦に関連する遺跡が所在している。藤原氏滅亡の後、岩手県南および一部を支配していた葛西氏も、16世紀になると一統支配が揺るぎだす。中小の家臣の間で緊張関係が高まり、特に天文11年(1542)から始まった伊達氏天文の乱以降は激しさを増し、大騒乱の様相を呈してくる。このような世情緊張の中で、磐井郡内でも大小様々な城館が構築、改築されている。遺跡周辺にも多くの城館がつくられている。

(3) 萩の馬場について

萩の馬場跡遺跡は宿駅跡で、源頼義軍、清原武則軍が、安倍頼時の弟（僧良照）が領主である小松柵を攻めるために、宿営した場所である。『陸奥話記』によると、萩の馬場は小松柵の南550mにあると記されており、現在の萩の馬場跡遺跡はそのことを手掛かりに埋蔵文化財包蔵地として選定した大まかの範囲である。宿駅や露営したことを裏付ける遺構、遺物が出土しているわけではない。基準となる小松柵も、現段階で擬定地とされており確かなものではない。『陸奥話記』では小松柵は南と東に河水を湛える淵があり、北と東は壁のようにそそり立つ崖になっていると記載され、磐井川北岸にあったとみられるが、それに該当する確定的な場所は見つかっておらず、現在は小松柵擬定地となっている。

康平5年(1062)、源頼義から幾度も懇願され、朝廷から命に服する形で清原武則氏もついに決意し、同年8月9日に1万余人もの大軍を栗原郡常岡（現宮城県栗原市築館付近）に到着し、後からきた源頼義軍3000余人と合流し、全体を7つの軍に編成した。1軍は清原武貞、2軍は橘貞頼、3軍は吉彦秀武、4軍は橘頼貞、5軍は源頼義、6軍は吉美侯武忠、7軍は清原武道を軍押領使とされた。一行は松山道（栗原郡より磐井郡に至る南北路）を北上し磐井郡中山の大風沢（現一関市萩荘字上本郷付近）を経て、8月17日に萩の馬場（現一関市萩荘字打ノ目付近）に1万3000人余りが到着し、宿営を築いた。萩の馬場の宿営の北約550mには、安倍氏の最南の城柵で安倍頼時の弟僧良照が領主である小松柵がある。この日は、出陣を忌む凶日なので、攻撃を開始するのを翌日にすることに決め、1軍、4軍の歩兵が偵察に近づいた。しかし、小松柵の城外にある兵士宿舎に火を放ってしまった。そこで城内の安倍軍は応戦し、合戦が始まる。源氏・清原軍は勇兵20余人を率いて柵の攻略を試みた。川を渡り急傾斜の法面に剣で穿ち削って足場を作り、鉾を杖のように用いて岸壁を登り、さらに木の柵の下部を破壊し乱入して、城内の安倍軍を擾乱させた。他方安倍宗任を率いる800余人の騎兵軍団が城外で戦ったが、坂東の精兵によって撃退され、宗任指揮下の精兵30余騎も清原軍に雷撃を受けほとんど殺傷されたという。安倍軍は小松柵に火をかけて逃走した。『陸奥話記』によれば、この戦いで、安倍軍は戦死者60余人、負傷者多数、源氏・清原氏軍は戦死者13人、負傷者150人であったという。清原軍は、そのまま追撃せずに、萩の馬場に駐留する、その後、長雨が18日と長く続き、食料が不足し軍兵が飢え苦しみ始める。そこで3000余人が、南の磐井郡仲村（現一関市花泉町花泉付近）に、食料調達に移動する。その他にも1000余人を物資運搬の妨害した地域に派遣し、萩の馬場の宿営中は6500余人と手薄になった。そこへ、9月5日安倍貞任たちは、精兵8000余人で磐井川を渡って攻め入るが、磐井川を背にした戦いは失敗に終わり退陣する。清原軍は、精兵800余人でさらに追撃し、夜、安倍軍の宿営である高梨宿・石坂柵（現一関市赤萩付近）に火をつけて奇襲した。安倍軍は敗走を続けた。最終的には、厨川柵で最期を遂げ安倍氏が滅びることとなる。

萩の馬場は、11世紀半ばに始まった前九年合戦において源氏・清原氏両軍が合流し、1万以上の兵士たちが宿営した最初の宿営地で、ここから、安倍氏の敗走が始まる歴史的な場所であった。

（本節は、樋口知志2016「前九年合戦」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館、を適宜参照し作成した。）

（光井）

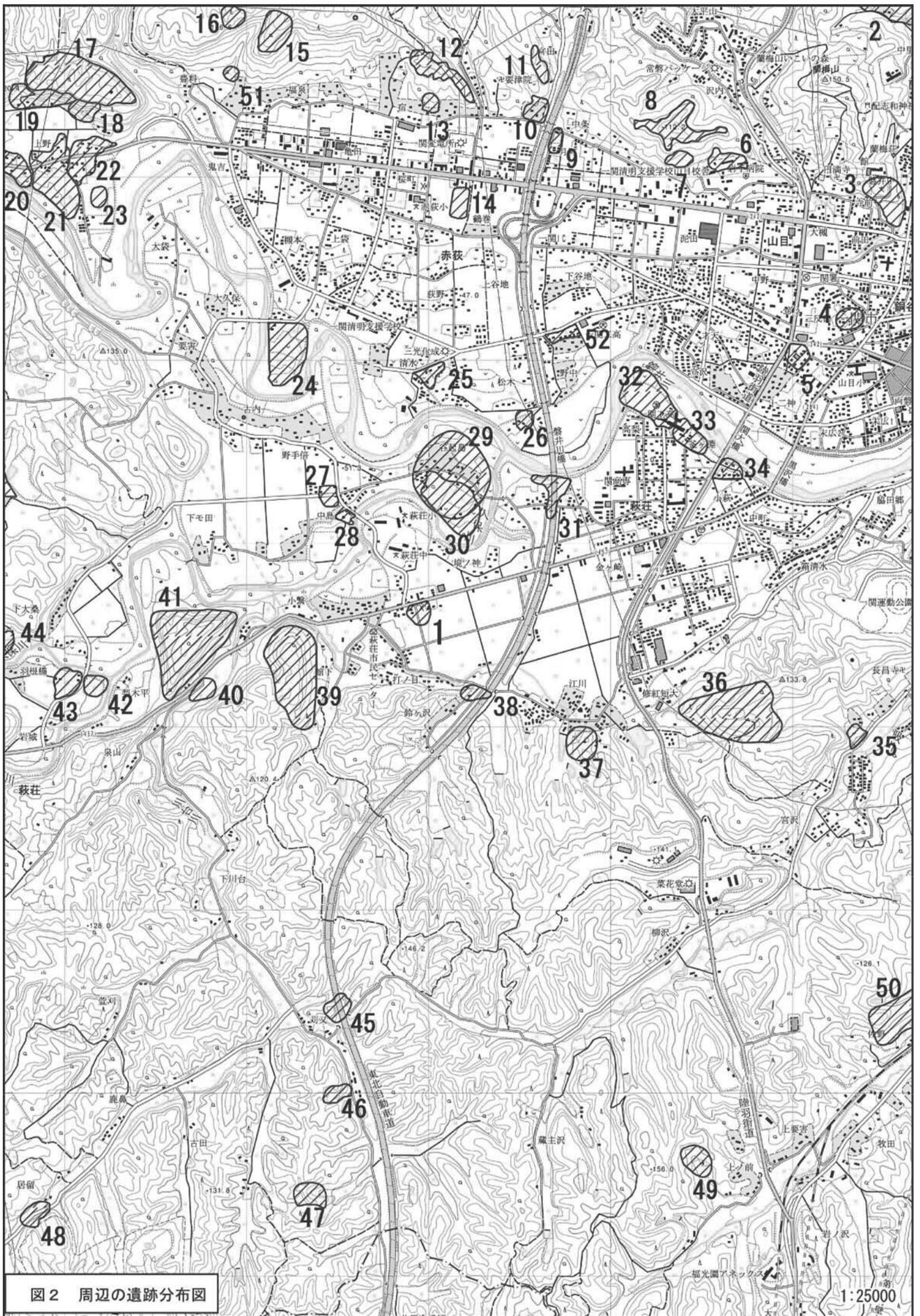


図2 周辺の遺跡分布図

1:25000

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
1	萩の馬場跡	その他の遺跡 (宿駅跡)	平安		
2	中里城 (安倍沢館・吉館)	城館跡	中世末	土塁・空堀	
3	臥牛館(伏牛館)	城館跡	中世末	平場	
4	小石名沢古館	城館跡擬定地	中世末		
5	十二神	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	
6	泥田庵寺跡A	社寺跡	平安	礎石・土師器・須恵器	
7	泥田庵寺跡B	社寺跡	縄文、平安	礎石・石器・土師器・須恵器・瓦	
8	若宮館(中条館)	城館跡	中世	空堀	
9	月町	散布地	平安	土師器	
10	赤萩焼	生産遺跡	近世	陶器	県教委調査時の名称は宮田遺跡
11	宮田館	城館跡	中世末	空堀	
12	赤萩館(日光館)	城館跡	中世	連郭・土塁・空堀・溝・土坑・造成層	
13	磐井駅擬定地	その他の遺跡 (宿駅跡)	平安		
14	弥生塔	その他の墓	近世		
15	田高館	城館跡	中世末	土塁	
16	石坂柵	城館跡	平安		
17	杭丁館	平場・土塁・空堀	中世末	土塁	
18	宝竜	散布地	縄文	石棒、石鏃、石匙、縄文土器	
19	宝竜Ⅱ	散布地	縄文	フレーク	
20	上野Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器・石鏃・フレーク	
21	上野Ⅱ	散布地	縄文	土坑・溝、縄文土器・石鏃・陶磁器・銭貨・木質遺物	
22	上野Ⅰ	散布地	縄文、近代	土坑・溝、縄文土器(晩期)・石器・陶磁器	
23	上野Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(晩期)・石鏃	
24	下袋	散布地	縄文、弥生	縄文土器(後期・晩期)・弥生土器	
25	松ノ木	散布地	平安	土師器	
26	口袋	散布地	弥生	弥生土器	
27	中島	散布地、集落跡	平安	住居跡、縄文土器(隣接地耕作土中から出土)・土師器	
28	天王塚	その他の遺跡(塚)			
29	小松柵擬定地	城館跡	平安		
30	谷起島	散布地	縄文、弥生	縄文土器(晩期)・弥生土器・石器	
31	下モ下釜	散布地、集落跡	縄文、平安、近世	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・礎・焼土・墳墓・ピット、縄文土器(早・晩期)・石器・土師器・銭貨・人骨	
32	釜淵	散布地	縄文	縄文土器・石器	
33	工業高校隣接	散布地	平安	土師器	
34	西光寺裏	散布地	縄文、近世	縄文土器(中期)・掘立柱建物跡	
35	宮沢	散布地	縄文	石鏃・石槍	
36	下黒沢館 (南館・片平館)	城館跡	中世末	土塁・空堀	
37	市野館(秋葉館)	城館跡	中世末	囲郭・空堀	
38	鈴ヶ沢	散布地、城館跡、 その他の墓	縄文、弥生、中世、 近世	平場・空堀・掘立柱建物跡・柱穴・溝、土壇墓・カマド・焼土、縄文土器(前・中期)・弥生土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器・羽口・鉄滓・鉄釘・毛拔・煙管・銭貨・人骨	
39	上黒沢城(片平館)	城館跡	中世	郭・大手口・土塁・空堀	
40	下川台	散布地	縄文	縄文土器(後期)・石鏃	
41	小姓館	城館跡	中世末		
42	羽根橋Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)・石鏃	
43	羽根橋Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)・石鏃・石鏃・石匙	
44	藤走	散布地	縄文	縄文土器(後期)・石槍・石鏃・凹石	
45	菊又	散布地	縄文	縄文土器・石鏃	
46	菊又Ⅱ	散布地	縄文	フレーク	
47	菊又一里塚	その他の遺跡 (一里塚)	近世	塚一対	S54.4.1市指定史跡「追街道一里塚」、R1.10.29歴史の道百選「陸奥上街道」
48	上川台	散布地	縄文	縄文土器・石槍・石鏃・石匙	
49	西沢	集落跡	平安	住居跡、土師器・須恵器	
50	的場館(西館城)	城館跡	中世末	囲郭・空堀	
51	福泉	散布地	縄文	縄文土器(後期)	
52	野中	散布地	弥生	弥生土器	

表1 周辺の遺跡一覧表

2 調査に至る経緯

令和4年(2022)2月2日、一関市萩荘字境ノ神355-1、358-1における分譲地造成工事にかかる埋蔵文化財発掘の届出が株式会社シリウスから提出された。この場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地萩の馬場跡遺跡の範囲外で、その範囲の端から北へ約50m離れたところにある水田であった。水田を住宅分譲地に転用する計画であったが、土地の境界に擁壁を設置するため現在の地表面から約40cmの深さを掘削するもので、分譲後の住宅建築においては、造成工事で行われる盛土内に住宅基礎が収まる計画であった。現況は水田であり、約40cmの掘削を行う場所が道路から離れており重機を入れることが難しかったため、事前の試掘調査は行わず、工事立会する旨を令和4年2月2日付教文第11001号文書で指示した。

その後、3月3日に行われた掘削工事に立ち会った。造成範囲内の北側と東側について、重機により地山まで少しずつ掘り下げて遺構・遺物の有無を確認した。その結果、造成範囲の北西部で柱穴と土坑を確認した。また表土から近代の磁器も確認している。この段階で遺構を確認した範囲は、北西部の東西約6m、南北約1.3mである。

その場で今後の進め方について協議した。その結果、事業計画の変更が難しいことから、遺構を確認した範囲は発掘調査が必要であること、それ以外の範囲は遺構・遺物を確認できなかったため工事を進めてよいことを両者で確認した。3月4日付で改めて埋蔵文化財発掘の届出の提出があり、3月7日付教文第12004号文書により発掘調査を指示した。

発掘調査は、3月8日から3月25日の期間で実施した。

(菅原)



※敷地の境界、その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。

縮尺 1/2500

図3 調査区位置図

3 調査結果

調査地点は、一関市萩荘字境ノ神355-1、358-1に所在する。標高は45mである。現況は水田である。調査は重機により、表土・Ⅱ層を除去した後、手作業で、Ⅲ層上面での遺構検出を行った。

調査期間は令和4年3月8日～3月25日。

調査面積は約120m²（うち精査面積50m²）。

調査区は不整多角形をなし、東西最大径約15m、南北最大径約13mである。調査は工事で深く掘り下げた北側部分を精査し、盛土される南側の部分は、平面実測を行った。

平面図の作成に当たっては、下記の基準杭の座標をもとに、実測を行った。写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は、以下のとおりである。

基準点1 (T1) X=-119994.837、Y=22695.214、H=45.895 m

基準点2 (S1) X=-119961.037、Y=22684.141、H=45.785 m

(1) 基本土層

I層：10YR4/4褐色シルト層。しまっていない。

粘性なし。層厚約20cm。

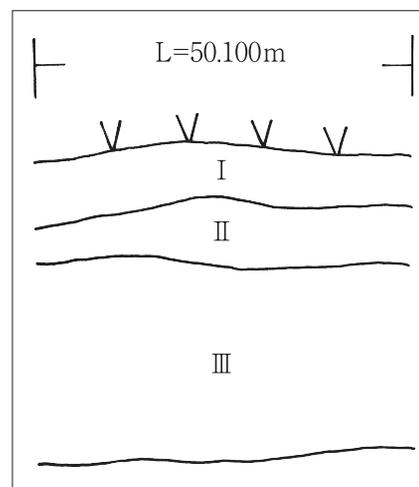
Ⅱ層：10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト層。

ややしまっている。粘性ややあり。

炭化物粒を少量含む。層厚約10～20cm。

Ⅲ層：5/6黄褐色粘土質シルト層。しまっている。

粘性あり。地山。層厚約50cm以上。



〈基本土層図〉

(2) 確認された遺構と遺物

確認された遺構は、掘立柱建物跡5棟、土坑

1基、柱穴列1基、柱穴群である。

掘立柱建物跡SB-1 (図8、9、写真図版2-1・2、5-1・2・3、6-2・3、7-5・6、表2)

調査区北東端に位置する。検出面はⅢ層上面である。北側の部分は調査区域外にある。検出された部分での規模は、北東-南西方向が2間2.96m (9.75尺)、北西-南東方向が1間1.52m (5尺)である。北東-南西方向の間尺は1.52m (5尺)で揃っている。北西-南東方向の間尺は1.44m (4.75尺)である。掘り方の形状は、大きいものP13、P25が不整形、小さいものP1、P22が楕円形で、規模はP13 (径43×42cm、深さ34cm)、P25 (径36×31cm、深さ21cm)、P1 (径28×20cm、深さ9cm)、P22 (径29×20cm、深さ9cm)である。柱穴痕の大きさは、P13 (径15cm)、P25 (径12cm)、P1 (径9cm)、P22 (径10cm)である。4個の柱穴は炭化物、焼土塊を多く含んでいる暗褐色粘土質シルト層で主に占められている。P25はP17に一部切られている。出土遺物はない。時期は形態、規模から中世以降と考えられる。

掘立柱建物跡SB-2 (図8、9、写真図版2-5・6、4-5・6・7・8、6-7・8、8-3)

調査区北側に位置する。検出面はⅢ層上面である。北側の部分は調査区域外にある。検出された部分での規模は身舎の間尺南北1間2.12m (7尺)、東西1間2.12m (7尺)、庇が南北1間2.12m (7

尺)、東西1間0.85m(2.8尺)である。掘り方の形状は円形である。身舎の柱穴の規模は、P3(径34×27cm、深さ55cm)、P12(径43×32cm、深さ15cm)、P11(径37×35cm、深さ34cm)である。庇の柱穴の規模は、P19(径23×19cm、深さ13cm)、P26(径25×21cm、深さ23cm)である。柱痕の大きさは、P3(径24cm)、P12(径15cm)、P11(径13cm)、P19(径10cm)、P26(径8cm)である。身舎の柱穴3個(P3、P11、P12)と庇の柱穴P1には炭化材、焼土塊を多く含んでいる暗褐色粘土質シルト層で主に占められている。炭化材、焼土塊は焼失建物を起源とする可能性が高いことから、別の建物が焼失した後、あまり時間を置かずに建てられたものと推定される。出土遺物はない。時期は形態、規模から中世以降と考えられる。

掘立柱建物跡SB-3(図8、10、写真図版3-3・4・5、4-4・5、7-3、4)

調査区北側に位置する。検出面はⅢ層上面である。規模は梁行1間3.52m(11.6尺)、桁行2間3.72m(12.3尺)である。桁行の間尺は1.8m(6.1尺)で揃っている。南側の桁行P29、P30、P31は未精査で平面実測のみである。掘り方の形状は、柱穴6個のうち5個がほぼ円形、P31の1個が楕円形である。規模はP7(径38×31cm、深さ30cm)、P11(径37×35cm、深さ34cm)、P21(径39×30cm、深さ32cm)、P29(径21×18cm)、P31(径68×52cm)、P32(径34×23cm)である。柱穴痕の大きさはP7(径20cm)、P11(径13cm)、P21(径18cm)である。精査した3個の掘り方の埋土は、上部に炭化物、焼土の小ブロックをやや多く含んでいる暗褐色粘土質シルト層で占められている。出土遺物はない。物置小屋的な建物と推定される。時期は形態、規模等から、中世以降と考えられる。

掘立柱建物跡SB-4(8、9図、写真図版3-8、5-7・8、8-1・2)

調査区北側に位置する。検出面はⅢ層上面である。検出された建物跡の規模は梁行1間3.1m(10.2尺)、桁行2間3.35m(11.1尺)である。桁行の間尺は1.6m(5.3尺)と1.75m(5.8尺)と不揃いである。南側のP32は未精査で平面実測のみである。北東隅側の柱穴は不明である。掘り方の形状は、P9とP24が不整形円形、P15とP32が楕円形である。規模はP9(径26×23cm、深さ22cm)、P15(径30×22cm、深さ52cm)、P24(径25×20cm、深さ15cm)、P32(径32×26cm)である。柱穴痕の大きさは、P9(径8cm)、P15(径10cm)、P24(径10cm)である。精査した3個の掘り方の埋土は、上部に炭化物粒、焼土粒をやや多く含む暗褐色粘土質シルト層で占められている。建物はさらに東に延びる可能性がある。出土遺物はない。時期は形態、規模から中世以降と考えられる。

掘立柱建物跡SB-5(図8、10)

調査区南側に位置する。検出面はⅢ層上面である。平面実測の調査を行ったものである。規模は梁行1間3.28m(10.8尺)、桁行1間2.24m(7.4尺)で東側に下屋のつく建物である。掘り方の形状はP33、P37が隅丸方形、P34、P35が不整形方形、P36、P38不整形楕円形である。規模はP33(径44×40cm)、P34(径52×42cm)、P35(径44×34cm)、P36(径54×38cm)、P37(径44×42cm)、P38(径62×45cm)である。平面上での柱痕は見つけられなかった。P33は他の柱穴を切っている。出土遺物はない。性格は小規模な建物と推定される。時期は形態、規模から、中世以降と考えられる。

柱穴列SP-1(図8、10、写真図版2-7・8)

調査区中央部に位置する。検出面は、Ⅲ層上面である。南北の柱穴列から西に直角に曲がって並んでいる柱穴群である。柱穴8個のうち、P4の1個は精査し、その他8個は未精査で平面実測のみである。規模は南北の長さが5.6mと東西の長さが3.82mである。柱穴間の長さは、北からP4-P28が1.92m(6.3尺)、P28-P39が1.56m(5.1尺)、P39-P40が1.06m(3.5尺)、P40-P41が1.06m(3.5尺)、西に曲がって、P41-P42が0.7m(2.3尺)、P42-P43が1.52m(5尺)、P43-P44が1.6m(5.3尺)である。間尺は不揃いである。掘り方の形状は、P16、P41が楕円形、それ以外は円形である。規模はP4(径43×42cm、深さ32cm)、P28(径39×31cm)、P39(径44×42cm)、P40(径36×31cm)、P41

(径51×46cm)、P42 (径27×23cm)、P43 (径29×22cm)、P44 (径38×38cm) である。柱痕が推定できたP4の大きさは径23cmである。他の遺構の柱穴と重複関係にある柱穴は3個である。出土遺物はない。柱穴間や柱穴の大きさが揃っていないことや直角に曲がっている。時期は不明である。

土坑SK-1 (図5、8、写真図版8-7・8)

調査区北西側で検出された。検出面はⅢ層上面である。炭化物粒、焼土ブロックを含む暗褐色土の広がりがみられ、遺構と確認したものである。北側の一部は調査区域外にある。重複する遺構はない。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径110cm、深さ32cmである。

埋土は、上半部が径1.5cm大の炭化物を多く、焼土粒をやや多く、径5～9cm大の亜円礫を少量含む暗褐色シルト層、下半部が黄褐色粘土質シルトの小ブロックを全体に少量含む褐色粘土質シルト層で構成されている。底面は緩い凹凸がある。壁面は西側が二重の段をし、東側から内湾しながら立ち上がっている。埋まり切らずに窪んでいた土坑に炭化物、焼土粒混じりの土で人為的に埋められたものとする。出土遺物はない。時期は不明である。

(光井)

4 まとめ

確認された遺構は掘立柱建物跡5棟、土坑1基、柱穴列1、柱穴群である。今回の調査は破壊される範囲の調査で、盛土され保存される南側にも柱穴が多数(平面形のみ実測)みられた。また調査区北側の調査区外にも柱穴などの遺構が広がっており、同じ平坦面であることから、遺跡はさらに広がっていると考えられる。今回検出された掘立柱建物跡は5棟である。SB-1、SB-2は北側の調査区域外に伸びている。SB-3、SB-4、SB-5は南側の未精査区域に伸びている可能性がある。掘立柱建物跡のすべての柱穴を検出できているものはない。SB-1掘立柱建物跡は東西1間、南北2間の検出で北と東側に伸びる。SB-2は南北、東西1間、東側に1間の庇をもち、北側または西側にも伸びる。SB-3は南北(梁間)1間、東西(桁行)2間の掘立柱建物跡としたものである。SB-4も南北(梁間)1間、東西(桁行)2間の掘立柱建物としたものである。SB-5は東西(梁間)1間、南北(桁行)1間で、南側に下屋がある掘立柱建物跡である。梁間、桁行の間尺を見ると、梁間の間尺は、SB-3が3.52m(11.6尺)、SB-4が3.1m(10.2尺)、SB-5が3.18m(10.5尺)、桁行では、SB-2が2.12m(7尺)、SB-3が1.84m(6.1尺)、SB-4が1.75m(5.8尺)と1.6m(5.3尺)、SB-5が2.24m(7.4尺)である。梁間は間尺が10～11尺、桁行は間尺が5尺、6尺、7尺であり一定でない。全体として小規模な建物であると考えられる。

SB-1、SB-2、SB-3、SB-4は互いに重複している。それぞれの掘立柱建物跡にある程度の時間差があると考えられる。出土遺物がなく時代の詳細は不明であるが、横手市下福田尻遺跡・下福田東遺跡から規模、形態が類似する梁間1間、桁行2間の小規模な掘立柱建物跡が多数検出されている。時期は古代から中世前期中心のものである。本遺跡のものも、時期的には中世以降としたが、古代も含まれる可能性がある。今後資料が増加することで実証されるものとする。今回調査した場所には、しっかりした掘立柱建物跡があり、また、炭化材、焼土塊が掘立柱建物跡の掘り方の埋土に多く含まれていることから、掘立柱建物が焼失後も掘立柱建物が再建されており、一定期間集落が形成されていた場所であることが確認できた。今回の発掘調査では中世以降の掘立柱建物の変遷解明につながる考古資料が見つかり、今後の研究に役立つものと考えられる。

(光井)

【参考引用文献】

一関市編集委員会1978『一関市史』第1巻通史

岩手県教育委員会1979『東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』岩手県文化財調査報告書第54集

萩荘文化協会1991『萩荘史』

藤井克介・玉井哲雄1995『建築の歴史』中央公論社

佐々木浩一2001「柱穴群から建物跡へ—遺構検出から遺構変遷まで—」『掘立と竪穴—中世遺構論の課題』
高志書院

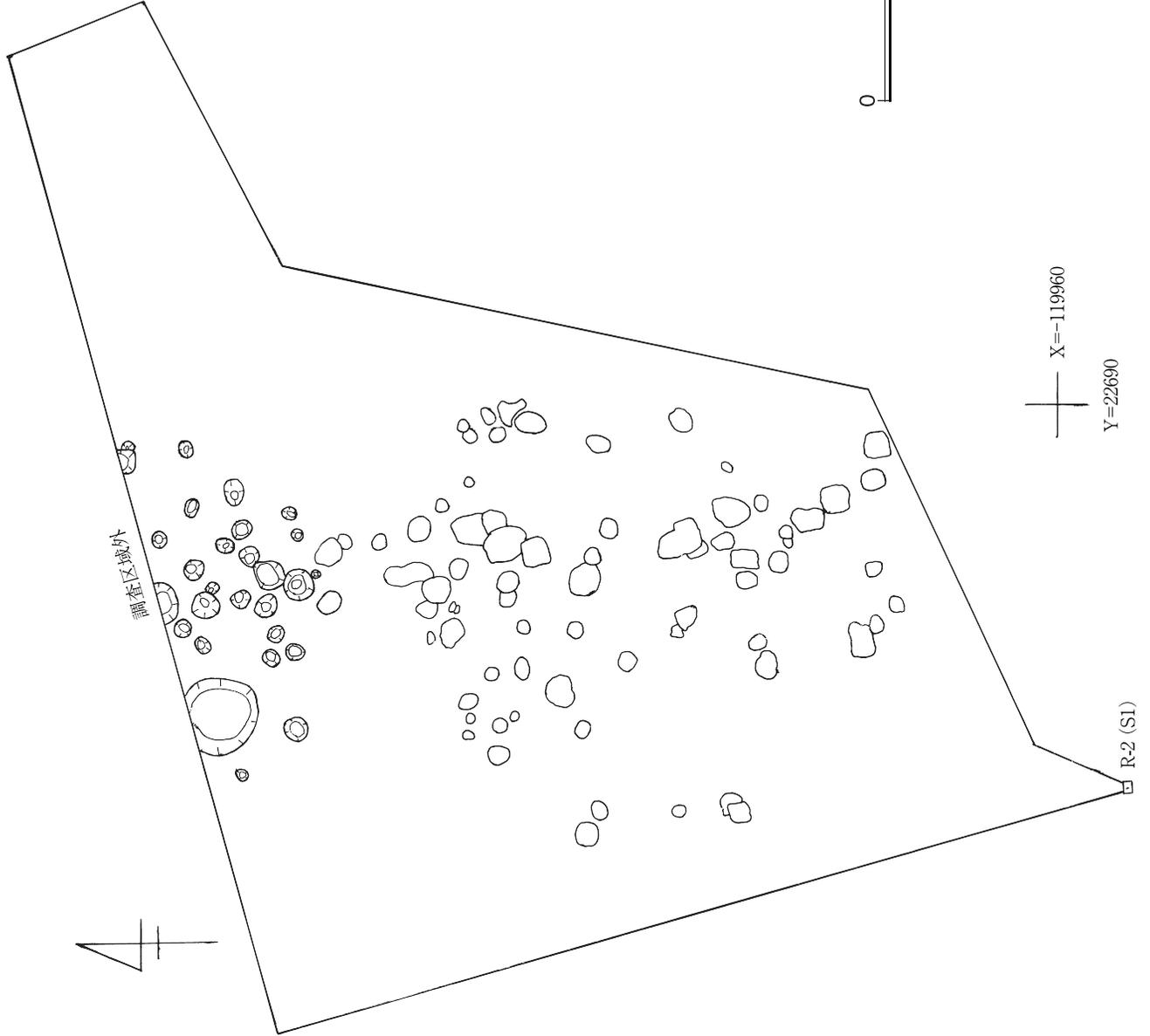
羽柴直人2001「柱間寸法が語るもの—岩手県内における中世後半～近世の掘立柱民家の柱間寸法について」
『掘立と竪穴—中世遺構論の課題』高志書院

樋口知志2016「前九年合戦」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館

横手市教育委員会2022『下福田尻遺跡・下福田東遺跡』横手市文化財調査報告第56集

□ R-1 (T1)

Y=22698
+ X=-119945



※北側のみ精査。南側は盛土されるため平面のみ実測

図4 萩の馬場跡 遺構配置図

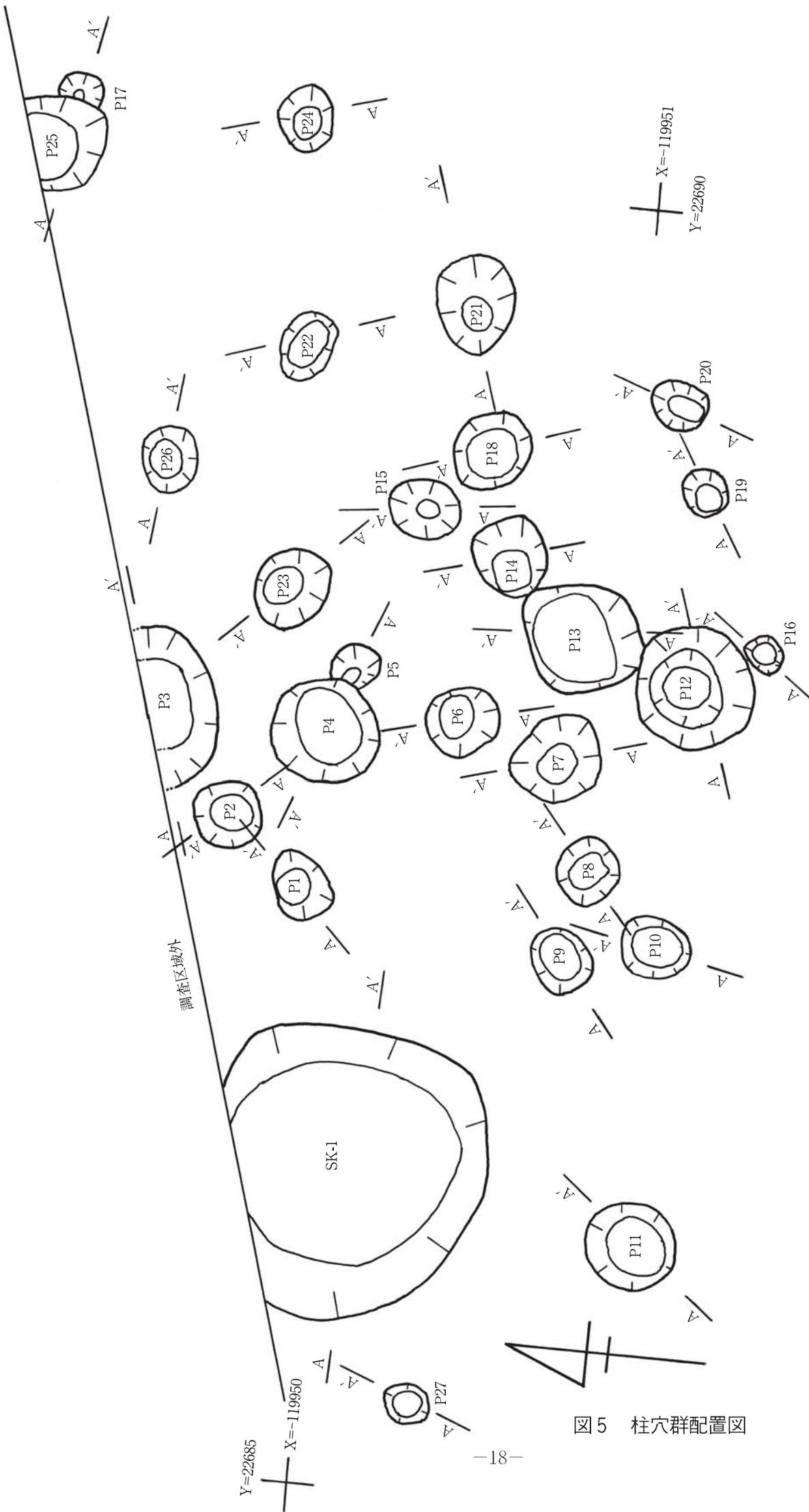


图5 柱穴群配置图

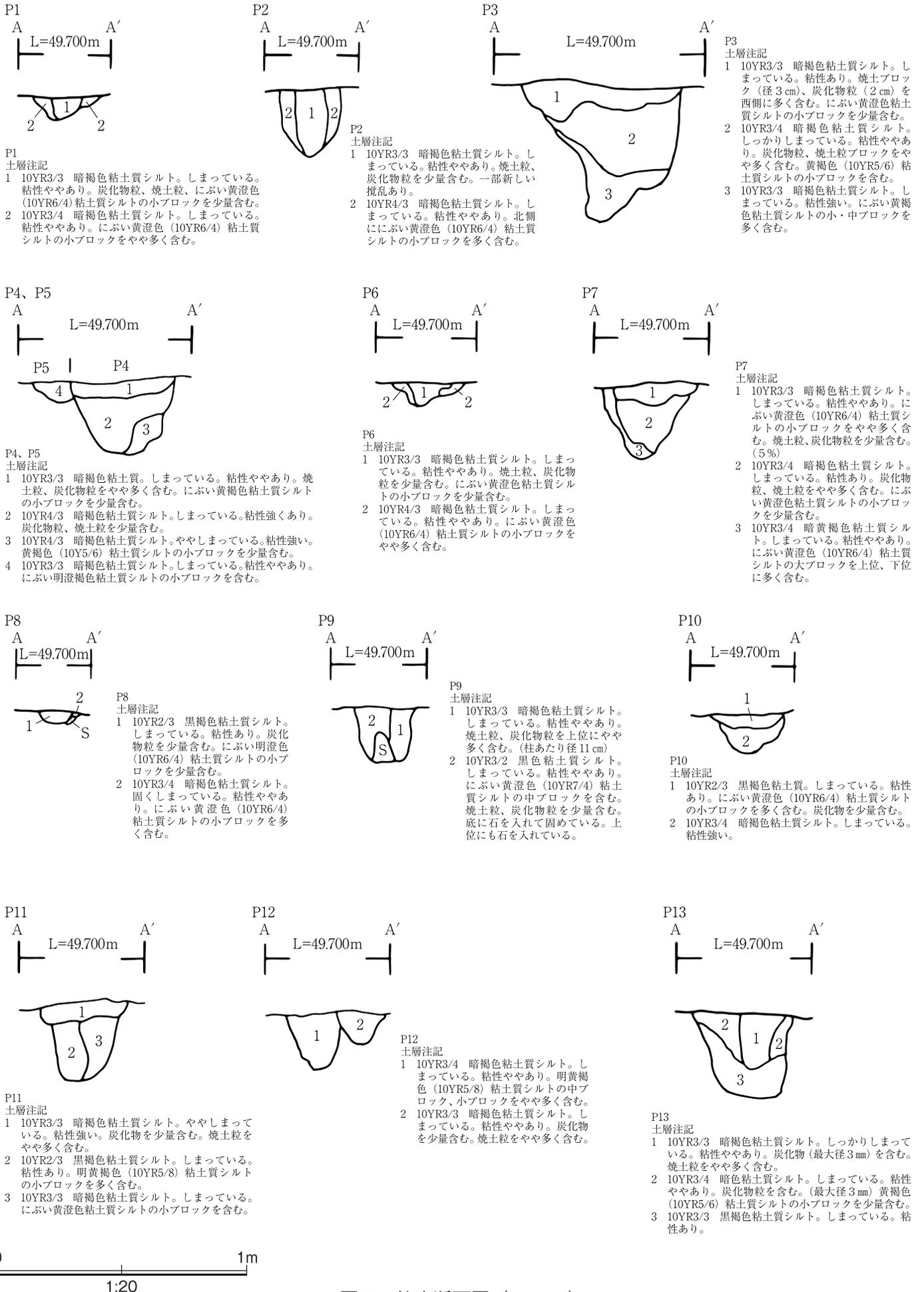


図6 柱穴断面図 (P1~13)

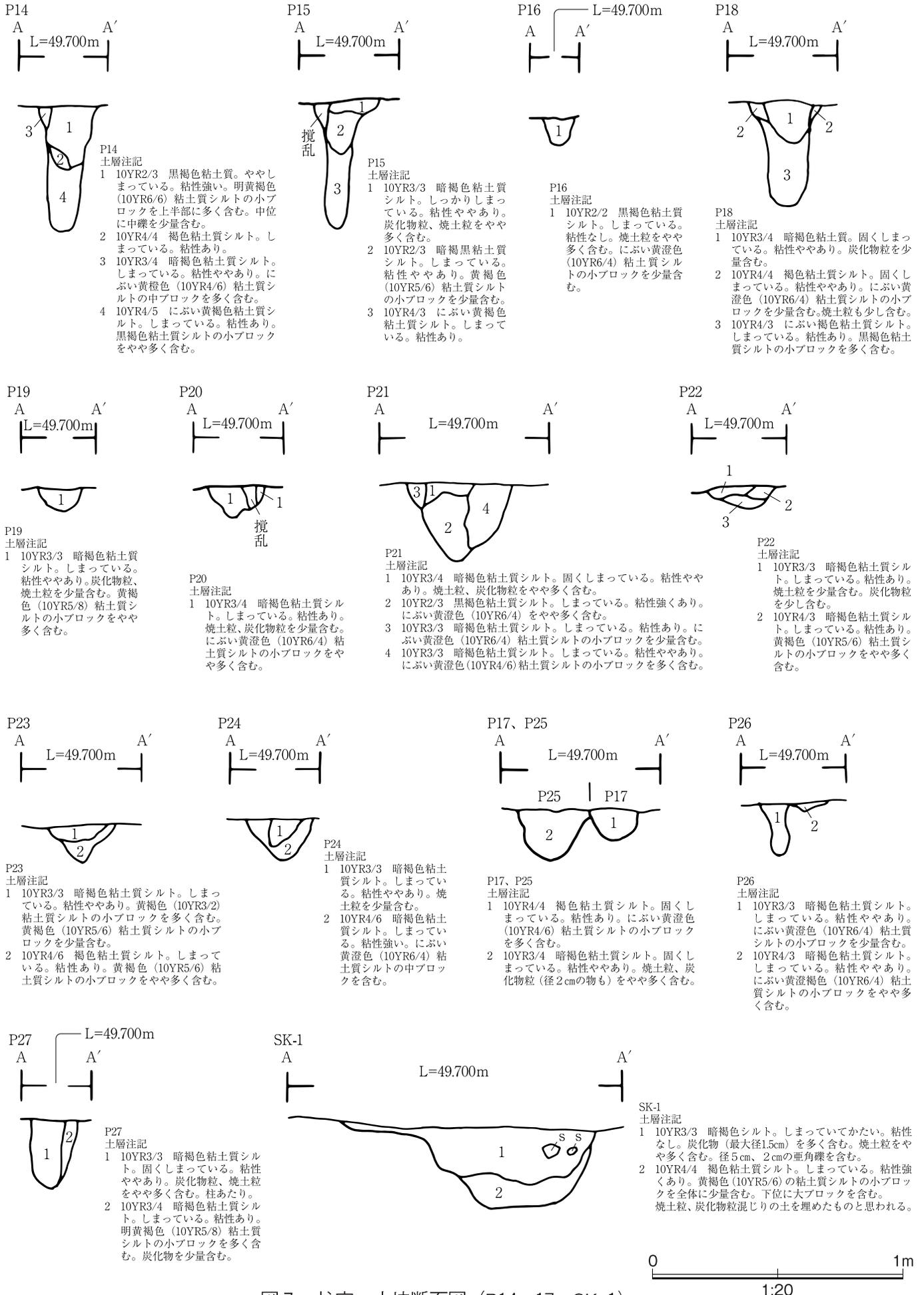


図7 柱穴、土坑断面図 (P14~17、SK-1)

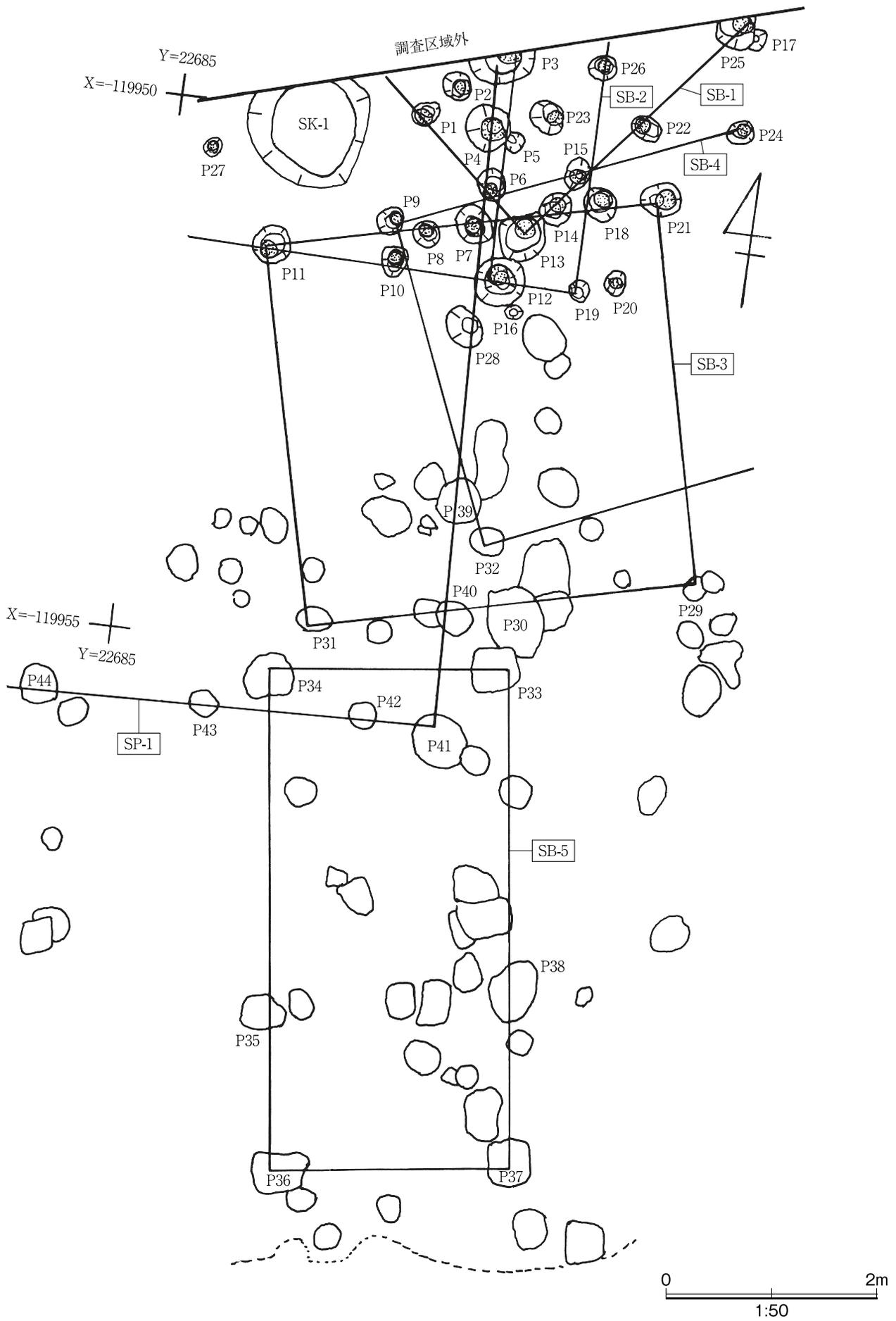


図8 掘立柱建物跡配置図

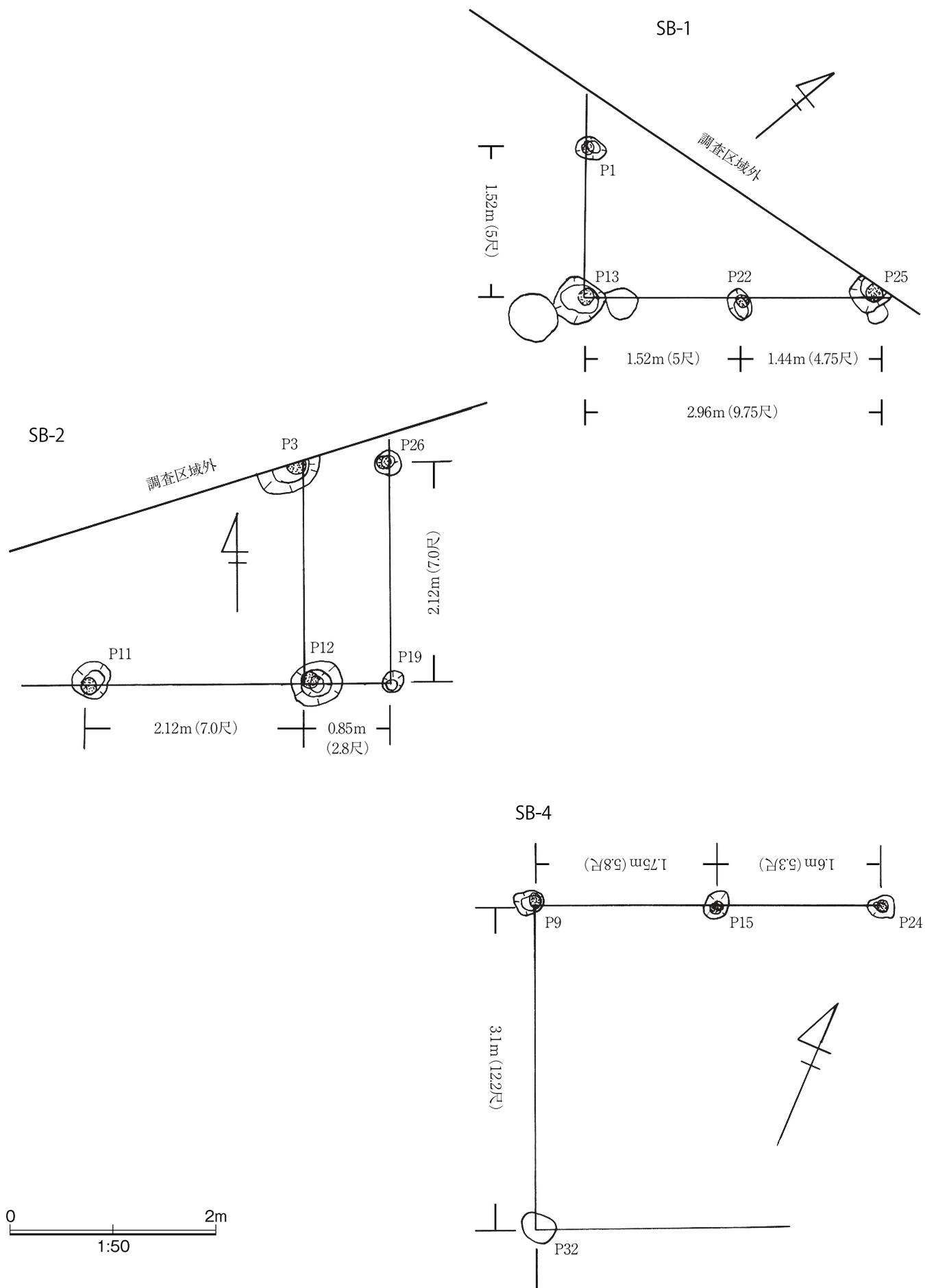


図9 SB-1、SB-2、SB-4 実測図

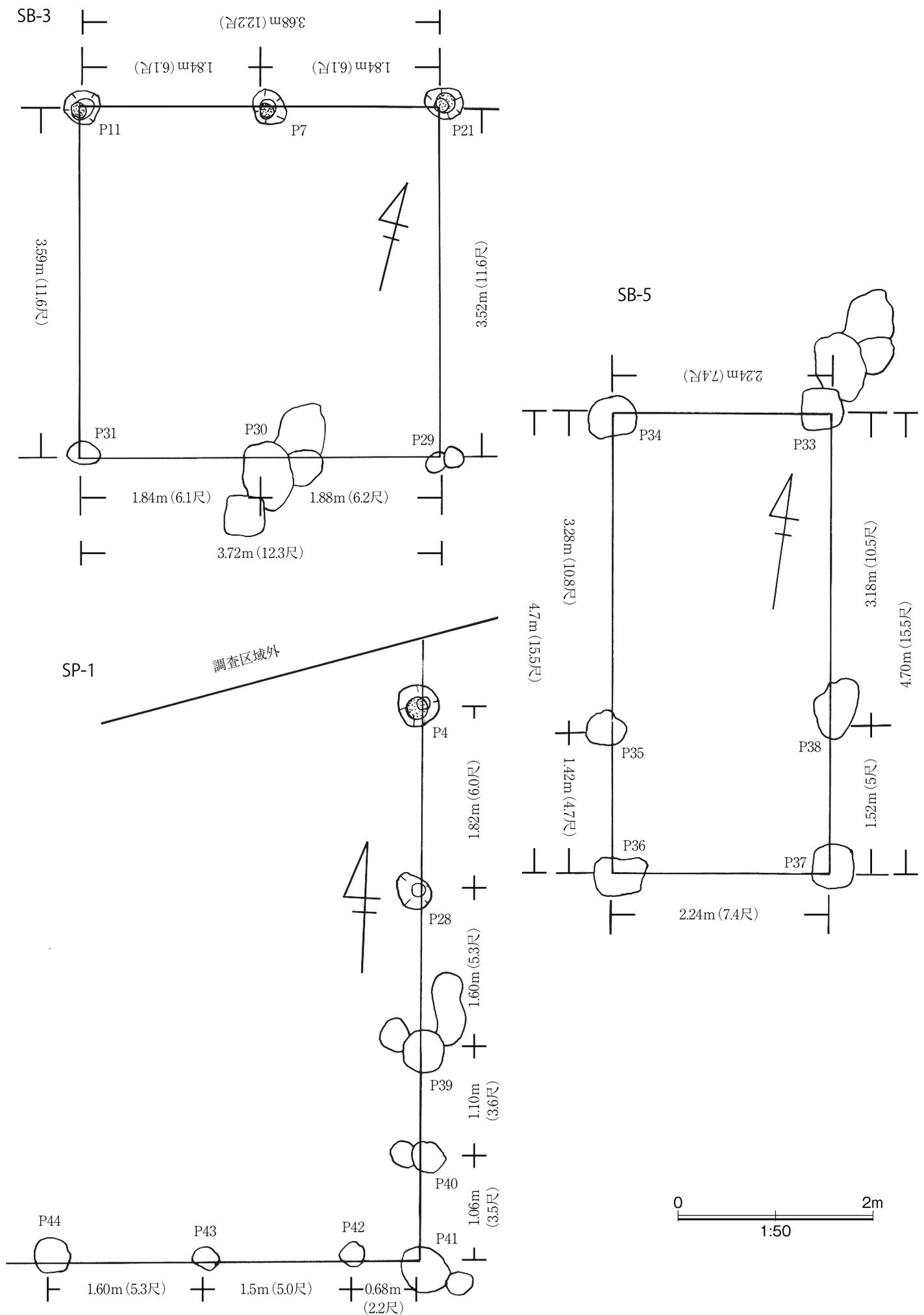


図10 SB-3、SB-5、SP-1 実測図

柱穴番号	規模			備考
	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	
P1	28	20	9	
P2	28	25	37	
P3	34	(27)	55	()は推定
P4	43	42	32	
P5	(20)	18	20	()は推定
P6	27	24	34	
P7	38	31	30	
P8	21	20	11	
P9	26	23	22	
P10	26	25	17	
P11	37	35	34	
P12	43	32	15	
P13	43	42	34	
P14	35	31	54	
P15	30	22	52	
P16	38	30	-	
P17	20	(15)	-	()は推定
P18	31	29	48	
P19	23	19	13	
P20	19	16	14	
P21	39	30	32	
P22	29	20	9	
P23	35	30	22	
P24	25	20	15	
P25	36	31	21	
P26	25	21	23	
P27	20	18	30	
P28	29	31	-	未精査 平面実測のみ
P29	21	18	-	未精査 平面実測のみ
P30	70	53	-	未精査 平面実測のみ
P31	68	52	-	未精査 平面実測のみ
P32	34	32	-	未精査 平面実測のみ
P33	44	40	-	未精査 平面実測のみ
P34	52	42	-	未精査 平面実測のみ
P35	44	34	-	未精査 平面実測のみ
P36	54	38	-	未精査 平面実測のみ
P37	44	42	-	未精査 平面実測のみ
P38	62	45	-	未精査 平面実測のみ
P39	44	42	-	未精査 平面実測のみ
P40	36	31	-	未精査 平面実測のみ
P41	51	46	-	未精査 平面実測のみ
P42	27	23	-	未精査 平面実測のみ
P43	29	22	-	未精査 平面実測のみ
P44	38	38	-	未精査 平面実測のみ

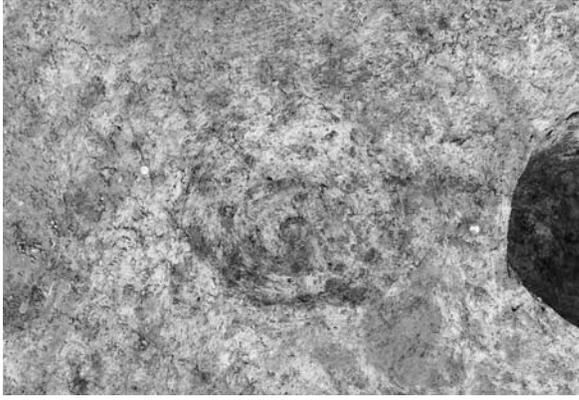
表2 柱穴一覧表



1 調査区柱穴群完掘状況（西から）



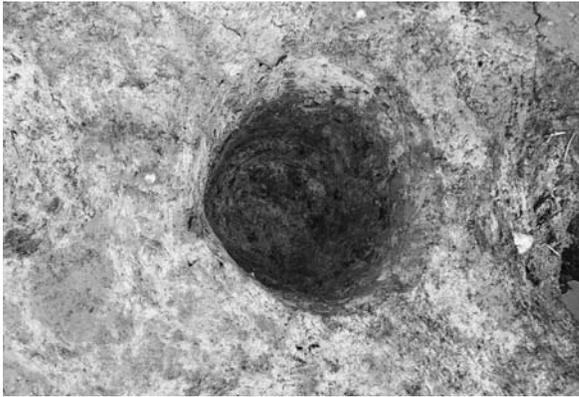
2 柱穴完掘及び柱穴群検出状況（右側は盛土するため未精査）（北西から）



1 P1 完掘状況 (南東から)



2 P1 埋土断面 (南東から)



3 P2 完掘状況 (北東から)



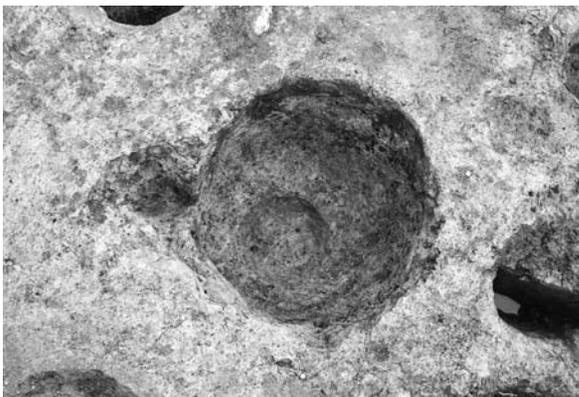
4 P2 埋土断面 (北東から)



5 P3 完掘状況 (南から)



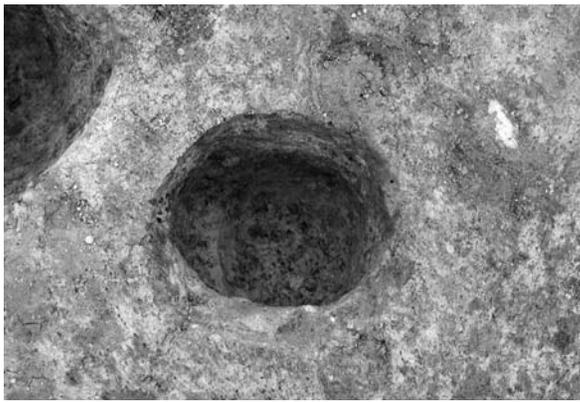
6 P3 埋土断面 (南から)



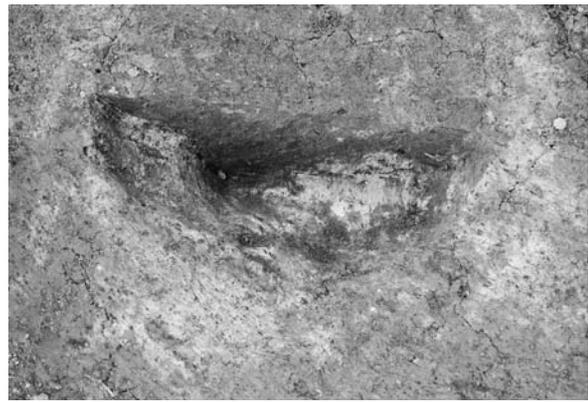
7 P4、P5 完掘状況 (北東から)



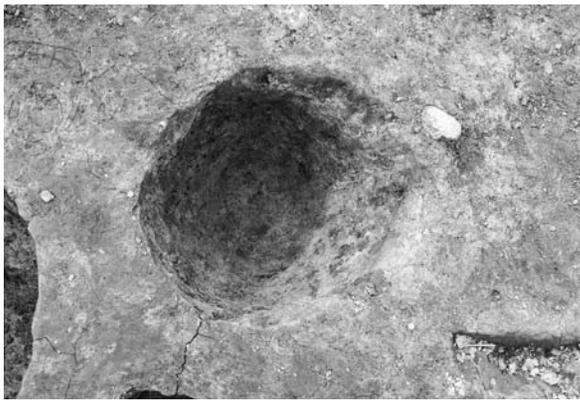
8 P4、P5 埋土断面 (北東から)



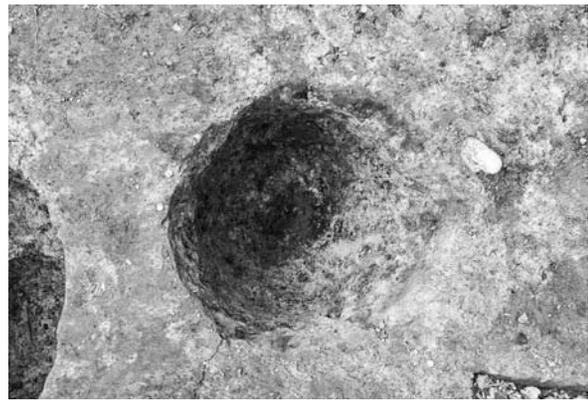
1 P6 完掘状況 (東から)



2 P6 埋土断面 (東から)



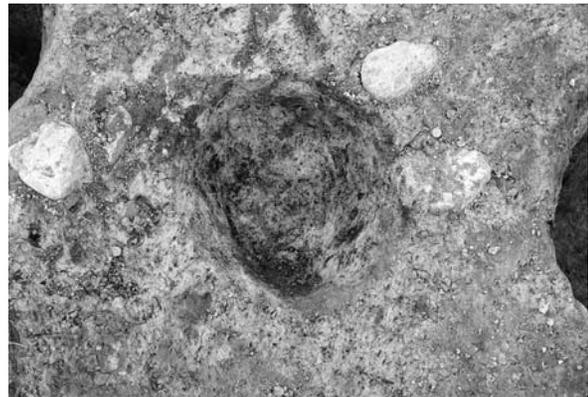
3 P7 完掘状況 (東から)



4 P7 柱痕検出状況 (東から)



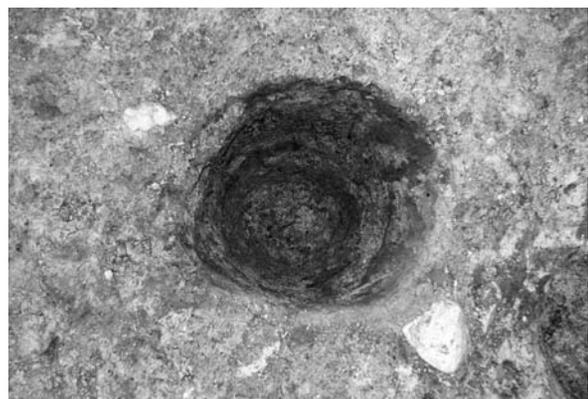
5 P7 埋土断面 (東から)



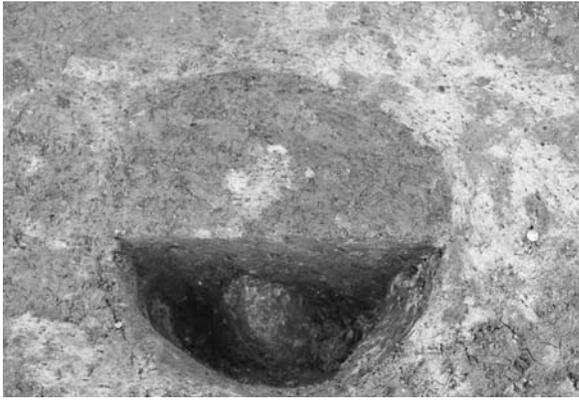
6 P8 完掘状況 (南から)



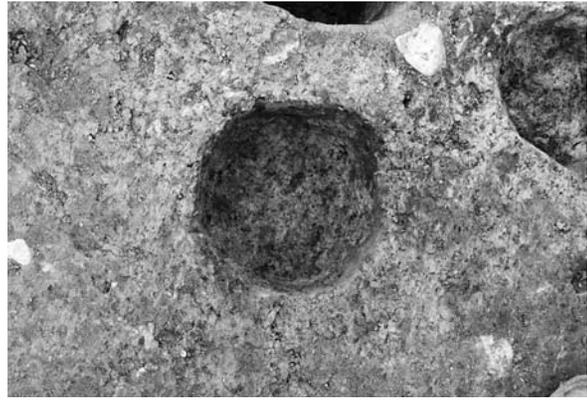
7 P8 埋土断面 (南東から)



8 P9 完掘状況 (南から)



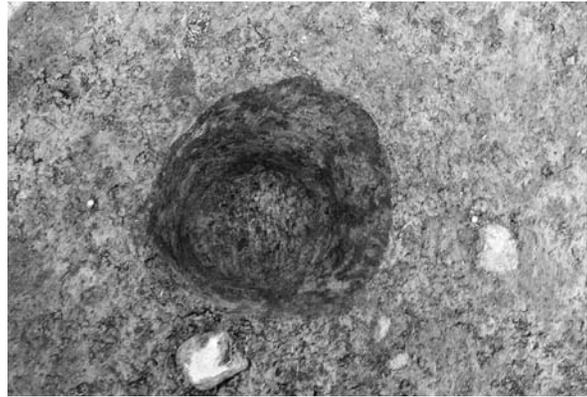
1 P9 埋土断面 (南東から)



2 P10 完掘状況 (南から)



3 P10 埋土断面 (南東から)



4 P11 完掘状況 (南から)



5 P11 埋土断面 (南東から)



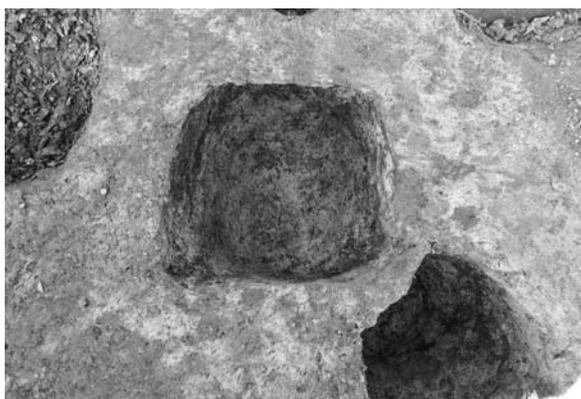
6 P12 完掘状況 (南東から)



7 P12 柱痕・建て替え (南東から)



8 P12 埋土断面 (南から)



1 P13 完掘状況 (南から)



2 P13 炭化材検出状況 (東から)



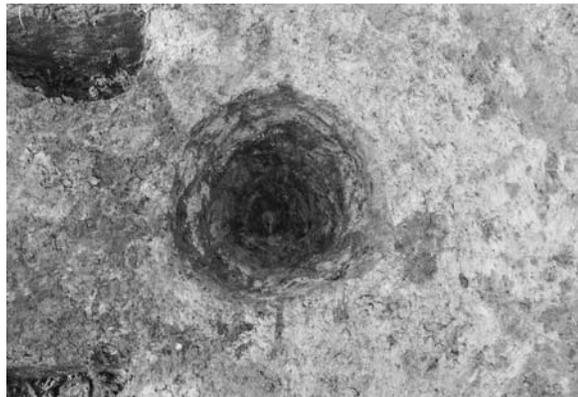
3 P13 埋土断面 (東から)



4 P14 完掘状況 (東から)



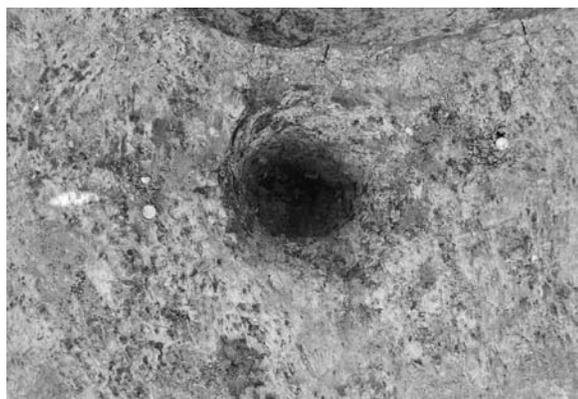
5 P14 埋土断面 (東から)



6 P15 完掘状況 (東から)



7 P15 埋土断面 (東から)



8 P16 完掘状況 (南東から)



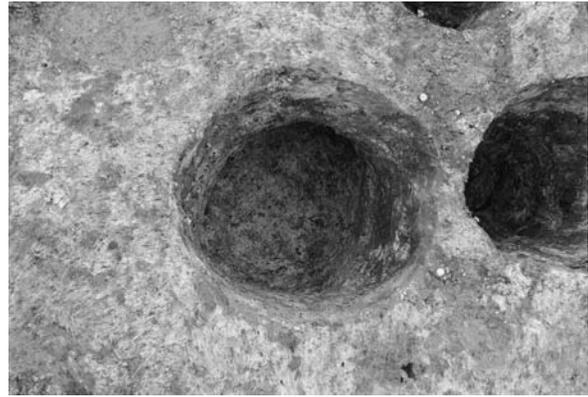
1 P16 埋土断面 (南東から)



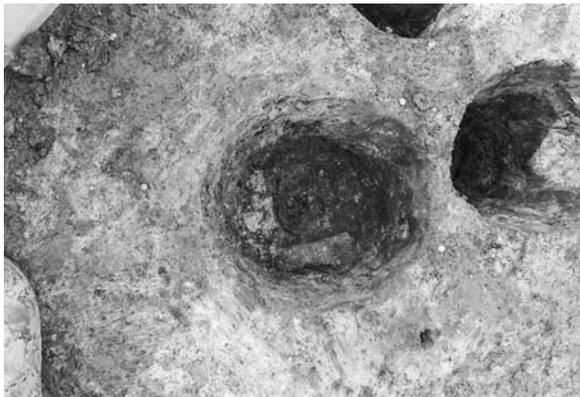
2 P17、P25 完掘状況 (南から)



3 P17、P25 埋土断面 (南西から)



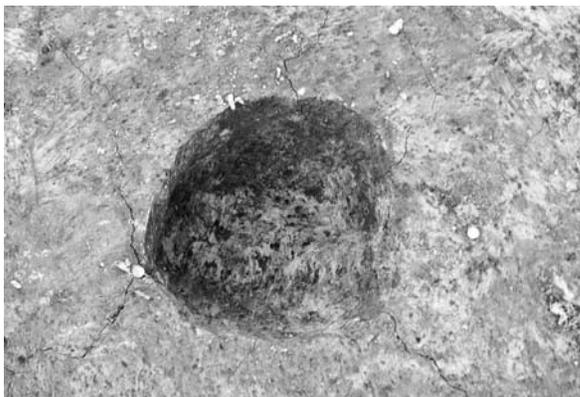
4 P18 完掘状況 (東から)



5 P18 柱痕検出状況 (東から)



6 P18 埋土断面 (東から)



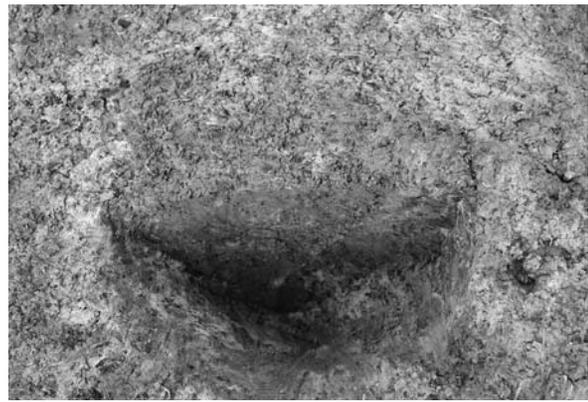
7 P19 完掘状況 (南東から)



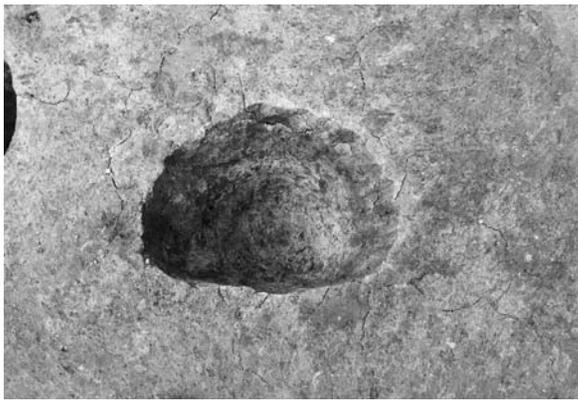
8 P19 埋土断面 (南東から)



1 P20 完掘状況 (南東から)



2 P20 埋土断面 (南東から)



3 P21 完掘状況 (南から)



4 P21 埋土断面 (南から)



5 P22 完掘状況 (東から)



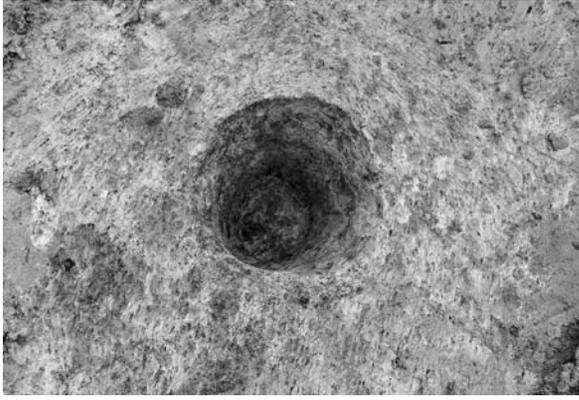
6 P22 埋土断面 (東から)



7 P23 完掘状況 (北東から)



8 P23 埋土断面 (北東から)



1 P24 完掘状況 (東から)



2 P24 埋土断面 (東から)



3 P26 完掘状況 (南西から)



4 P26 埋土断面 (東から)



5 P27 完掘状況 (南東から)



6 P27 埋土断面 (南東から)



7 SK-1 完掘状況 (南から)



8 SK-1 埋土断面 (南西から)

抄 録

ふりがな	はぎのばばあといせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	萩の馬場跡遺跡発掘調査報告書							
副書名	分譲地造成に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第39集							
編著者名	菅原孝明・光井文行・阿部 充							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒029-3105 一関市花泉町涌津字一ノ町29 TEL 0191-82-2242							
発行年月日	2024年4月8日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はぎのばばあと 萩の馬場跡	いちのせきしはぎしょうあざさかい 一関市萩荘字境 のかみ ノ神355-1、358-1	03209	OE05- 0239	38°55'9"	141°5'42"	20220308 ～ 20220325	120m ²	分譲地 造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
萩の馬場跡	その他の 遺跡（宿 駅跡）	古代、中世	掘立柱建物 土坑 柱穴列 柱穴群					
要約	<p>今回の調査では、遺跡が破壊される範囲（調査区北側）で掘立柱建物跡5棟、土坑1基、柱穴列1基、柱穴群を確認した。掘立柱建物跡の一部は、さらに北側の調査区外に広がると思われる。遺物がないため詳細な時代は不明で、掘立柱建物跡の形態や規模から中世以降と考えられるが、古代も含まれる可能性がある。</p>							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第39集

萩の馬場跡遺跡発掘調査報告書

分譲地造成工事に伴う発掘調査

発行年月日 令和6月4月8日

発行 株式会社シリウス
〒020-0824
岩手県盛岡市東安庭二丁目12-15
電話 019-604-6860

編集 一関市教育委員会文化財課
〒029-3105
岩手県一関市花泉町涌津字一ノ町29
電話 0191-82-2242

印刷 株式会社一関プリント社
〒021-0031
岩手県一関市青葉一丁目7-24
電話 0191-23-4586